平成十五年四月十五日

# 門徒の力　本願寺の護法

西美濃十ヶ寺　室原二ヶ寺含む参加

安福彦七

## 門徒の力　本願寺の護法

蓮如五十一歳のとき、寛正六年、東山大谷本願寺が比叡山の山門衆から攻撃を受けた。これを始めに布教中、次々と本願寺一向一揆が起こっていった。

戦国時代の本願寺史を調べてみると、山科・石山合戦や信長の長島攻めなど次々に一揆が広がってゆく。本願寺がどうして、あれほどまでにねばり強い力をもっていたのか、又、山科・石山合戦には西美濃の寺、十ヶ寺からも三百二十三人もの多数が参戦している。その中には室原の正海寺と長願寺の二ヶ寺で六十余人が参戦出陣している。これは興味深いことで、郷土史としては是非調べておかなければならないことである。

私は特にこの一揆を調べるに当たっては、室原から参戦した山科・石山防戦を重点にしたことをご理解されたい。

# 目　次


一、比叡山の僧兵　東山大谷の本願寺を襲う　……1
二、蓮如の吉崎での布教と加賀一揆　……2
三、山科合戦起こる　西美濃本願寺門徒出陣（室原正海寺・長願寺参加）
(1) 山科合戦起こる　……3
(2) 西美濃十ヶ寺の出陣　……3
(3) 山科本願寺本山の戦況　……4
(4) 本願寺は大坂石山へ移動し防禦戦となる　……6
(5) 美濃勢の帰国と十三日講の始まり　……7
四、信長と戦う石山合戦
(1) 合戦前の動き　……9
(2) 戦況　……11
五、一向一揆余談　……12
六、参考年譜　……13

# 一、比叡山の僧兵　東山大谷の本願寺を襲う

蓮如（五十一歳）は、寛正六（一四六五）年に比叡山（ひえいざん）と対立する。一月九日、比叡山の山門衆は一向宗の隆盛を危んで、その仏像、教典を焼く。神明和光を軽蔑し、邪法を興行するのは見逃せないと、討伐の正当をうたい、早鐘を打ち、大谷の本願寺を攻め破却した。これを寛正の法難という。この時、蓮如の下に集まったのは、琵琶湖の西岸の堅田（かただ）の人々と湖南の金森、赤野井の人々であった。比叡の山門勢はこれを攻めた。門徒衆は防戦につとめたが、かなわず退散した。光明十字名号（一向宗本尊）が堅田の本福寺に残っている。ここに湖西門徒集団の拠点があった。

この戦いの終わりの、応仁元（一四六七）年になると、応仁の乱が始まり、京都は大混乱となる。蓮如は詫び状を三月二十八日に交わし、この攻防を終わりにした。この頃から、戦国時代に入り、自力防衛となり、一向一揆の体勢に入るのである。

## 東山大谷本山を捨てる

応仁二（一四六八）年、蓮如は東山大谷を捨て、湖西・南の地に至り、滞在僅かで同年五月には、北国布教の旅に出るのである。

文明三（一四七一）年、北陸の吉崎に向かった。ここに滞在して布教を始めた。大谷を捨て四年後である。

## 二、蓮如の吉崎での布教と加賀一揆

1. 吉崎の布教は日毎に盛んとなって、吉崎坊舎が建てられ、さらに盛大をきわめてゆく。
吉崎の布教は四年間であるが、新たなる教典類や名号の制定、大量に下付。行書六字名号、正信偈、和讃（わさん）、親鸞回帰（かいき）、御文（おふみ）（御文章）での教化等、布教に力を注がれた。

2. 加賀一揆起こる
文明七（一四七五）年、加賀守護家の長年の内紛に本願寺勢と高田勢との対立がからんで、北陸最初の一揆が起こった。その後、紛争が続いて長享二（一四八八）年、再び大規模な一揆が起こった。加賀守護富樫政親は倒されて死す。以後本願寺門徒が主導権を握る。
「一向一揆とは、法をひたむきになって守る。聖戦は蓮如の佛法観→新興武士権力も信長に向かって石山合戦に発展していくのである。」

3. 文明七（一四七五）年、蓮如は吉崎を脱し、河内へ逃がれる。

4. その後、天正三（一五七五）年の信長が越前攻めによって本願寺一揆は平定される。

# 三、山科合戦起こる　西美濃本願寺門徒出陣

## （室原正海寺・長願寺参加）

山科に本山を定め、建設する。文明十五（一四八三）年に完成。その後約五十年間教団は大いに発展。蓮如は文明七（一四七五）年、既に吉崎を脱し河内の出口へ逃がれ、枚方（ひらかた）に於て布教に熱心であった。

蓮如　延徳元（一四八九）年　南殿隠居し実如九代継ぐ。
〃　明應八（一四九九）年　蓮如没す。八十五歳。（三月二十五日没す）
実如　大永五（一五二五）年　実如没す。
証如　享禄三（一五三〇）年　証如（十七歳）十代を継ぐ。同四年には越前の朝倉氏を破る。

### (1)　山科合戦起こる　天文元（一五三二）年

敵は比叡山と日蓮宗、六角定頼の四万の連合軍が共同で攻撃を仕掛けてきた。証如十七歳であった。本願寺総大将の下間頼慶（しもつまよりよし）はすぐれた大将で、風雲急を知り、各地へ軍令を飛ばした。

### (2)　西美濃十ヶ寺の出陣

頼慶の軍令を持った信濃の巫女（みこ）と見えし女、近江路から多賀の山越えで美濃路へかかる。十ヶ寺法中の室原正海寺法中門徒二人、靜里長源寺門徒二人、荒川勝光寺門徒二人、計六人は、情況急であって、

山科本願寺の詳細不明のため山越えにて、山科に赴く。そのとき上石津の時山から江州へ向かう山中で、巫女に出会い共に心中を話し合い、疑いなき情況の急を知り、軍令書も受け取り、そのまま国元へ帰り、西美濃の十ヶ寺へ知らせた。各寺は早速準備した。

## (3) 山科本願寺本山の戦況

七月八日、手勢合わせて六十一人。三手に分れて出発した。同月十三日、山科に到着する。さらに同月十四日、兵具、兵糧米を用意し、十ヶ寺法中の士卒三百二十三人（内二十三人、軍上大工）、伊勢・伊賀越えをして速やかに参籠（さんろう）の予定申し上げると、「遠方のところ早速参着神明の至り」とのお言葉。

守備に早速つき、兵糧を用意する。既に八月二十三日となる。観音寺より追々敵が迫る。山科の西東北の通りの山々は砦（とりで）をかまえる。翌二十四日、卯（う）の刻（朝の六時）筑地間近く攻め寄せる。敵は大將畠山刑部大夫、池田主税之助で、その勢力一千騎。本願寺側は勇戦したが味方は少なく、その上僧・農民では敗軍となり、さらに敵は火を放ちたので、山科を放棄して石山に向かった。証如上人は兵員の姿になり、敵に発見されることなく、首尾よく八月二十四日、無事に石山坊舎へ入られた。

この戦いは法難急を告げ、尾張、美濃、その他からも一大事と山科に集まって来たものの、山科本山はすでに焼けて跡形もない。あわれさに憤りを感じ、石山へと後を追った。そして、早い者から警護加勢したので、この戦いは次第に向運に向いて一同は安堵した。

討死は美濃勢二人、手疵二十七人を出した。このさいの敵の総大將は細川晴元であった。

## ◉西美濃惣坊主衆十ヶ所組参加者三二三人

（御味方各寺人別記　元和三年丁巳八月十三日改之）

| | |
|---|---|
| 荒川 | 勝光寺六世 淨秀、并新発意 淨入道、舎弟 淨念、士卒 幸之丞、和田新六郎、雑兵 三十五人 |
| 入方 | 光泉寺十一世 玄良、並舎弟 徳丸、士卒 飯沼喜藤太、傍島八郎次、雑兵 三十九人 |
| 栗原 | 西法寺開基 順誓、栗田卯三郎、栗田助左衛門、雑兵 十九人 |
| 室原 | 正海寺四世 賢順、士卒 金森又八、大宅治郎右衛門、宮川善十郎、安福惣内、杉野甚七、雑兵 二十三人 |
| 靜里 | 長源寺十世 智円、並新発意 順了、士卒 羽賀半左衛門、早野兵庫、早野兵加、山内茂平次、雑兵 三十八人 |
| 室原 | 長願寺第二世 了順、士卒 近藤源左衛門、青木徳三郎、清水半兵衛、同 庄蔵、雑兵 二十七人 |
| 若森 | 淨宝寺第二世 惠雲、士卒 吉田源兵衛、同 治兵衛、佐藤六良助、雑兵 二十八人 |
| 綾野 | 淨徳寺第三世 教恩、士卒 桑原利左衛門、早野勘左衛門、雑兵 二十六人 |
| 平 | 順行寺第三世 順行、士卒 河合六大夫、同 茂平治、河合治助、雑兵 二十六人 |
| 北方 | 西順寺第九世 了慶、士卒 渡辺甚左衛門、井上勇次、雑兵 二十六人 |

## (4) 本願寺は大坂石山へ移動し防禦戦となる

この天文元年八月から、十世 証如、十一世 顕如の時代になる。天正八（一五八〇）年まで石山本山時代で約五十年間戦いが続いた。

天文二（一五三三）年、石山に於ては、八月上旬より恨みをもつ類党は、石山へ押し寄せ合戦に及ぶ。諸国より門徒集まり加勢したものの、戦力劣り、御一門滅亡とあってはと決戦数度に及び、その頃攝州を始め、近辺の加勢は多く討死。美濃勢も討死、手疵多数となった。敵も戦労し且に阿修羅の様相。これを繰り返し、数度の決戦は十月中旬に至り漸くやんだ。

この戦いの仲間の戦死者の死骸を集め、葬式をする。このこと上人お聞きになり、御感の余り、戦労者へ御拝顔され里に残した妻子の歎きをあわれみ、御寿像一軸、御裏御真筆下され、感状二通を十ヶ寺の門末へ授与されたのであった。その文、次の通り。

一、今度の戦場において、報恩を思い佛敵のために漠大の信切ふかく感賞捨印の実意には往還二種の回向を具す謝徳のおもいより我、壽徳を与うものなり

八月　　西美濃十ヶ寺
諸道場坊主中
門徒中

二、今度の大乱につきて、佛祖のおもい、戦功奇特の至り感にたえ候　全く弥陀願力のしからしむる懸志ならんと涕泣禁じがたく、おぼえ候　なお早く一同に安養淨

土の往生を目出度遂げ給うふべく候

八月　　釈　　証　　如

美濃国拾ヶ所道場坊主中

此時　御　袈　裟　拝領

右の通り頂戴いたし安堵の思いをなし、御暇を乞い、帰国するなり

攝州野田福島の勢も討死あるにより、別臨御書下され、その文に言わく、今日の合戦に討死は二十一人のよし、いたわしきこと、ありがたく候　討死のかたが極楽往生とげ候　あなかしこ

野　田　惣　中　へ　　証　如　御　印

右の通り下され、野田の御坊に泊まっていた遠近の御門末大いに喜び帰国せり。

## (5)　美濃勢の帰国と十三日講の始まり

さて、美濃勢の本国へかえって、討死の忌日を弔い、師檀来集して昼夜の法事をいとなみ、毎月同様に御影会場廻し在りて、勤め続けるに、上人天文二十三年八月十三日、三十九歳にて遷化され、それよ

り此方、御講致日となして毎月十三日講と改め十ヶ所会合す。その後四十年余を経て教如上人は十ヶ所御門末を召させ証如上人御真影御拝覧あそばされしに、合戦毎に供奉なせし年暦へし故、破損しおるを感ぜられ修復下され同時に裏書をなされたり。

一、拾ヶ所十三日講の御影、九ヶ所の御門末にて御守護なせしに、元和三年に宣如上人の御聴に達し、御真影御覧あそばし、十三日講中へ書き下されしは、東西分派の後九ヶ村の御影に十ヶ村と下されしは、教如上人の裏書の例を引き給い、八十余年の星霜を経しといえども、御在せの今日を思い、なお有難く待りぬ　さりながら、本廟非情ならんときのお流れ汲み奉る　御門末、平生にこころがけ御法義相続して討死の人々とおなじ浄土の往生を遂げ給ふうべきことこそ肝要とぞおもひ待りぬ

討死　七人
手疵　五十九人

天保六年末閏七月日

# 四、信長と戦う石山合戦

## (1) 合戦前の動き

永禄一一（一五六八）年　顕如（二代）の時代に信長は足利義昭を奉じて京に入る。

同　一二（一五六九）年　信長は本願寺に石山を退去命ず。

元亀　元（一五七一）年　本願寺は、三好、六角、朝倉と結び対抗する。九月、雑賀（さいが）孫市の本願寺入りによって、下間（しもつま）法橋、法専坊信照の三大将揃い対信長作戦をねる。

同　二（一五七二）年　信長は、福島、野田城の拠点へ攻撃を仕掛ける。九月十二日なり。

本願寺は、今の大阪城の位置にあった。

孫市の鉄砲三千丁は評判が高かった。

### ◉孫市の本願寺入りの風景

孫市の本願寺入りの服装は、八咫烏の黒染の陣羽織で、乗馬姿の入城（寺）であった。和歌山から泉州平野を威風堂々と進んだ。石山本願寺の巨大な山門が静かに開いた。阿弥陀堂、御影堂、それから廊下続きに白、黒書院が立ちならぶ。御門跡は百万石以上の動員力ある宗門將軍である。石山本願寺は強大なる一向一揆に成長している。

### ◉各地方の一向一揆の情況

1. 加賀一国百万石を平定した地侍と合議制の「宗教共和国」を作り上げて、上杉、朝倉に対向

した。蓮如の秘書官下間蓮宗の才腕よる。

2. 伊勢長島を中心に処々の要塞化は半鐘一つで武士、百姓が集まり戦う体勢である。

3. 江州も本願寺王国で大寺の要塞化は半鐘一つで武士、百姓を集め戦う。

4. 安芸も本願寺王国で寺は城として戦う。

本願寺一向一揆の宗教観

「死は弥陀の世界に行って生る」

5. 下間蓮宗は本願寺の家老となり、軍事的才腕によって兵馬の指揮をとる。

6. 天文二年二月十日、証如は堺を奪い、細川晴元の和に応じた。この時、家老の下間蓮宗は足利幕府の大大名細川晴元と戦い、堺を脱取した。晴元は淡路にのがれた。この時は本願寺法主（門跡）を日本の天王として、下間蓮宗は幕府を開き、將軍とならん勢いであったと、世間でさわいだという。

7. 当時、信長に向かって戦える者は本願寺のみであった。本願寺は城廓であった。信長は天下を取り、ここに城を築く予定をしていた。当時、堺は信長の勢力下で、鉄砲が天文十二年に伝わってから、銃器・火薬の大商が行われ、本願寺は孫市と武蔵屋とが密談をしていた。

8. 当時の石山本願寺は城廓であった。加賀の築城家が設計したものといわれる。

- 四方は八丁堀で深い。
- 城壁が高い。
- 水利・海運の便、良好である。

以上、本願寺は当時、蓮如以来教団仕立に成功し、強大な力を有していたことを窺がわせる。

## (2) 戦況

元亀二（一五七一）年九月十二日、第一回目に信長が仕掛けた戦いは、福島・野田の拠点に対してであった。福島は大阪福島区新淀川・堂島に囲まれる農村の開けた土地で、本願寺から二里（八㎞）の地である。野田は信長に追われた三好氏の軍勢が本願寺の援助を得て、本国の阿波で勢力を盛り返して、ここに城を筑きかけた心強い城である。信長はこの城に向かって九月十二日、押し寄せる。兵力二万、信長は直接指揮を取って攻めた。三好は苦戦している。本願寺は戦闘態勢をととのえる。

本願寺は軍議の半、孫市が鐘を鳴らした。次々鐘を打ち鳴らし、二十里（八〇㎞）四方へ鳴り響き、信徒・僧兵は武装して集まる。

孫市二千人の軍を率いて闇の中を西へ行く。本願寺徒歩隊は鋤鍬を持って集まる。満湖になったら堤を切る。織田軍はそれによって水没する。火薬は濡れる、鉄砲はうてない。下間軍と三好隊の攻撃で織田軍は天満へ退いた。

第二回の戦いは、天満の本陣攻めであった。寺と五㎞の地点の淀上江堤（かさがえつつみ）（都島）から守口へ、稲の刈り入れの時である。敵に取られるので、信長隊を追い払えと、牛曳車（うしびきくるま）五十台、護衛隊は島与四郎千六百人、淀上江堤にかくれ鉄砲三〇〇〇丁を使い、淀上江堤の合戦となる。信長は佐々成政に命じ、農民を追い払えと、本願寺は農民護衛刑部に兵五百を引いさせて敵に激突した。この戦いは本願寺軍に有利に終わった。

石山本願寺の位置は、守るも攻めるも低濕地帯で、大小堀・川・堤・水田と戦術を駆使することは容易でないことを知るのである。守備は地形を知りなれてこそ有利に展開し、有利に立つことが出来る。信長も秀吉も本願寺を追い払って、自分が城の予定地にしていたのである。経験豊富な武將の必然の着眼だったにちがいない。

この(2)の戦況は初期の一部にすぎないが、攻防を繰り返し、初戦から十一年後の天正八年三月七日に本願寺光佐は朝廷の斡旋により信長と講話して終わる。光佐は紀州に退く。

信長は二年後の天正十年に本能寺の変起こる。

## 五、一向一揆余談

蓮如はいつも一向一揆でなく真宗であると力説されていたと言います。当時、一向一揆がどういうことかもわからない人が多かった時代でした。

一向とは辞書には「すこしも」「――かまわない」とある。又一揆とは土着民とか農民の暴動とある。

一向（一揆の）という語については、一向宗（衆）を当時、他宗の人は、無碍光衆（むげこうしゅう）・無碍講宗・一向宗（向＝迎＝講）・他力宗・門土宗などとさまざまに呼んでいた。宛字も多かった。これは成長期の教団であったことを物語っている。当時、一向は否定的な意味をもっていたという。

蓮如が一向宗ではなく、真宗であると力説していたことは当然であったであろう。

# 六、参考年譜

| 本山 | 年代 | 西暦 | 史実 |
|---|---|---|---|
| 親鸞 | 承安 三 | 一一七三 | 親鸞は日野の日野有範の長男に生れる |
| | 建仁 二 | 一二〇二 | 九十九坊騒動鎮圧　源頼家時代に越前の黒田真与がこれに当る |
| | 弘長 二 | 一二六二 | 親鸞入滅　九十歳（十一月二十八日） |
| 存如 62 | 建武 二 | 一三三五 | 九十九坊が新田氏と結び足利に対した時焼かれた |
| 蓮如 47 | 長禄 一 | 一四五七 | 蓮如八世をつぐ　四十三歳（存如七代　六十二歳没） |
| | 寛正 一 | 一四六〇 | 正信偈大意を著す（四十六歳） |
| | 〃 二 | 一四六一 | 御文を著す（四十七歳） |
| 51 | 〃 六 | 一四六五 | 比叡山僧兵が東山大谷の本願寺を破壊　近江へ逃がる |
| 53 | 応仁 一 | 一四六七 | 応仁の乱起こる |
| 54 | 〃 二 | 一四六八 | 東国布教に旅立つ |
| 57 | 文明 三 | 一四七一 | 吉崎坊舎を作る　盛大となる　名号・教典・御文大量下付 |
| 60 | 〃 六 | 一四七四 | 吉崎坊舎・寺内町焼かる |
| 61 | 〃 七 | 一四七五 | 加賀一揆起こる　蓮如は吉崎を脱し、若狭→河内の枚方に出る |
| | | | 吉崎に三年　六十一歳のとき |
| 63 | 〃 九 | 一四七七 | 応仁の乱終わる（十年間続く　京都は焼け野となる） |
| | 〃 一五 | 一四八三 | 山科本願寺完成　銀閣寺完成 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 長享　二 | 一四八八 | 北陸に大規模の一揆起こる　守護富樫正親死す　本願寺門徒主導権を握る |
| 蓮如75歳 | 延徳　一 | 一四八九 | 蓮如は山科南殿に隠居　実如に九代を譲る |
| 実如9代 | 〃　一 | 〃 | 表佐宝光寺は栗原山九十九坊から真宗に転ず |
| | 〃　一 | 〃 | 正海寺は住職本田学氏の文章によれば、このころに九十九坊から真宗に転じただろう　それは山科合戦に参加しているから |
| | 明応　八 | 一四九九 | 蓮如死す　山科本願寺に於て（八十五歳　三月二十五日没） |
| | 永正一〇 | 一五一三 | 室原長願寺は本願寺末寺として僧正応が創建す（不破郡史） |
| | 大永　五 | 一五二五 | 実如死　同七年光教（証如）得度　十歳 |
| 証如10代 | 享禄　三 | 一五三〇 | 十代証如（光教）となる。 |
| | 〃　四 | 一五三一 | 一向一揆越前で朝倉氏を破る |
| | 天文　一 | 一五三二 | 山科合戦始まる　証如の時代 |
| | 〃　一 | 〃 | 正海寺　賢順以下二十八人、長願寺　了順以下三十二人参加戦い不利　証如（十七歳）大坂へ逃れる |
| | 〃　二 | 一五三三 | 八月二十七日　石山本坊に入る<br>光教は二月十日　堺を奪う　細川晴元の和に応ず |
| | 〃　三 | 一五三四 | 七月　石山坊舎を本山と定める<br>本願寺光教即位料献上　正親町天皇即位 |
| | 〃　五 | 一五三六 | 木沢長政と摂津中島で戦い破れる |

| 本山 | 年代 | 西暦 | 史実 |
| --- | --- | --- | --- |
| 証如 | 〃　五 | 一五三六 | 六角定頼と和す |
| | 〃　六 | 一五三七 | 朝廷より大僧都に任官 |
| | 〃　一一 | 一五四二 | 大坂石山本願寺を創立す |
| | 〃　一二 | 一五四三 | 種子島に鉄砲渡る |
| | 〃　一二 | 〃 | 十一世顕如誕生 |
| | 〃　一七 | 一五四八 | 証如「權僧正」となる |
| 顕如11世 | 〃　二三 | 一五五四 | 証如　八月十三日　三十九歳で没す　顕如十一世となる |
| 准如12世 | 弘治　一 | 一五五五 | 信長清洲へ移る |
| | 永禄一一 | 一五六八 | 信長京都に入る　足利義昭を奉じて入京する |
| | 〃　一二 | 一五六九 | 信長は本願寺に石山退去を伝える　石山合戦始まる<br>信長は本願寺と戦う（永禄十二年～天正八年まで　約十一年間） |
| | 元亀　一 | 一五七〇 | 本願寺は三好・六角・朝倉と結び信長に対抗す<br>顕如はさらに雑賀孫市・下間法橋・法専坊信照の三大將により作戦をねる |
| | 〃　二 | 一五七一 | 信長は伊勢長島を攻める |
| | 天正　三 | 一五七五 | 長篠の合戦　武田軍大敗<br>信長は越前の一向一揆平定（九月二日） |
| | 〃　四 | 一五七六 | 四月四日　石山本願寺を攻める。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 天正 五 | 一五七七 | 二月十三日 紀州雑賀孫市を攻める |
| | 〃 五 | 〃 | 十一月二日 信長右大臣となる |
| | 〃 八 | 一五八〇 | 三月七日 信長は本願寺の光佐と和睦 |
| | 〃 八 | 〃 | 光佐は石山を落ち、紀州さぎの森へ行く |
| | 〃 一〇 | 一五八二 | 正海寺初代賢龍（天正十年四月一日（同寺系図））本能寺の変起こる（六月二日） 信長没す 四十九歳 |
| | 〃 一〇 | 〃 | |
| | 文禄 一 | 一五九二 | 顕如没す（十一月二十四日） 五十歳没す |
| 西 准如 | 慶長 五 | 一六〇〇 | 関ヶ原合戦 |
| 東 教如 | 〃 七 | 一六〇二 | 東本願寺派に分れる 西―東派に分れた |
| | 一八 | 一六一三 | 金龍山正海寺三月 僧定龍創建東派 |

12代 准如 教如 慶長七年 お西 准如 お東 教如

平成十五年四月十五日

門徒の力　本願寺の護法

岐阜県養老郡養老町室原六〇一

安　福　彦　七

著書　『室原の歴史』三〇〇頁

冊子。多芸郡金屋鋳物師

。室原の曳軸

。室原福源寺の由緒と沿革

。石井兄弟二十九年目の敵討

。名医　北尾春圃

その他